

五世紀、倭国の王統譜とその物語

高 寛 敏

はじめに

1. 五世紀の王統譜の成立過程
2. 仁賢の即位
3. 「目」の物語
4. 来目稚子物語
5. 押木の玉纒事件

おわりに

キーワード：倭五王・鳥の物語・播磨の縮見
と葛城の志志見・目の物語・嶋
稚子と来目稚子・押木の玉纒

はじめに

『宋書』には、五世紀の倭王として讃・珍・濟・興・武の倭五王のことが、時間の経過に従って記載されている。この五王が『古事記』・『日本書紀』（以下、記紀）のどの倭王に当たるかについては、従来から多くの論議があった。そのなかで、武＝ワカタケから推して、王名の比定は全て字訓で解くべきであると説いた山尾幸久説⁽¹⁾は、従来の研究を新しくおし進めるものであった。最近、西條勉氏は、山尾説を継承し

つつ、王統譜はいく度かの改変を経ているので、倭五王は必ずしも記紀の倭王に限定する必要はないという観点に基づいて、倭五王を字訓によって記紀の人物に比定し直し、かつ、それが記紀の王統譜に至るまでの改編過程についても論じた⁽²⁾。倭五王比定についての西條説は論理的に一貫しており、当面の系譜復元に依拠しうると考えられるが、系譜の完成過程で、なぜ履中と反正が登場するのかが不明とするなど、なお再検討の余地を残している。

一方、西條氏は、四世紀の王統についても論じながら、『上宮記』一云にみえる継体祖先系譜は、推古代の歴史編纂に関するもので、それは応神から継体までが六世代である、ということを前提にしていることを明らかにした⁽³⁾。この点も卓説であって、筆者は西條説を批判的に継承しつつ、五世紀以前の王統譜は、欽明代頃の系譜(一)、推古代の系譜(二)、天武・持統代以後の系譜(三)となって、完成されたことを論証した。『上宮記』一云の継体祖先系譜は、系譜(二)の作製に先だって、王権によって試みにつくられたものなのである⁽⁴⁾。

(1) 山尾幸久「王統継承系譜の成立」(同『日本古代王権形成史論』岩波書店、1983年)

(2) 西條勉「倭の五王と古代王権の系譜学」(『国史館大文学部人文学会紀要』28、1995年)

(3) 西條勉『逸文上宮記』の〈一云〉とヤマトタケル

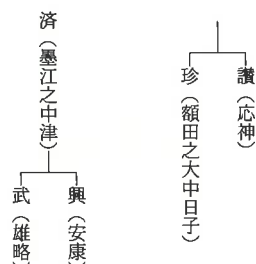
大王系譜」(『萬葉』147、1993年)

(4) 拙稿(A)「神功物語の形成」近刊、(B)「倭国の建国神話と朝鮮」(『朝鮮大学校学報』3、1998年)、(C)「倭建物語の形成」(『東アジア研究』20、1998年)

ただ、今まで筆者が試みてきた系譜とその物語の検討は、四世紀以前に重点があり、五世紀については事のついでに触れる程度であった。そこでここでは、五世紀の系譜と物語に焦点を合わせて検討したいが、まず系譜の成立過程を、記の記述を中心にして、論ずることから始めることにする。

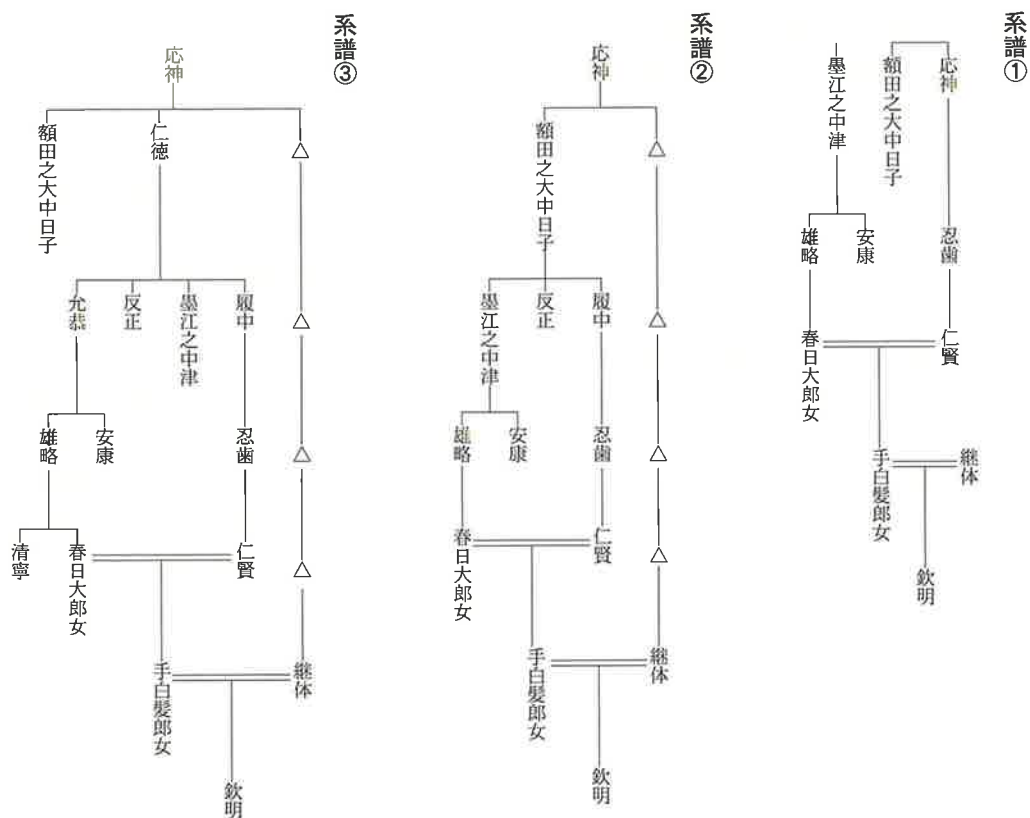
1. 五世紀の王統譜の成立過程

西條氏は、倭五王の讃を応神、珍を額田之大中日子、済を墨江之中津、興を安康、武を雄略に比定した。それを『宋書』の系譜に当てはめると、次のようになる。

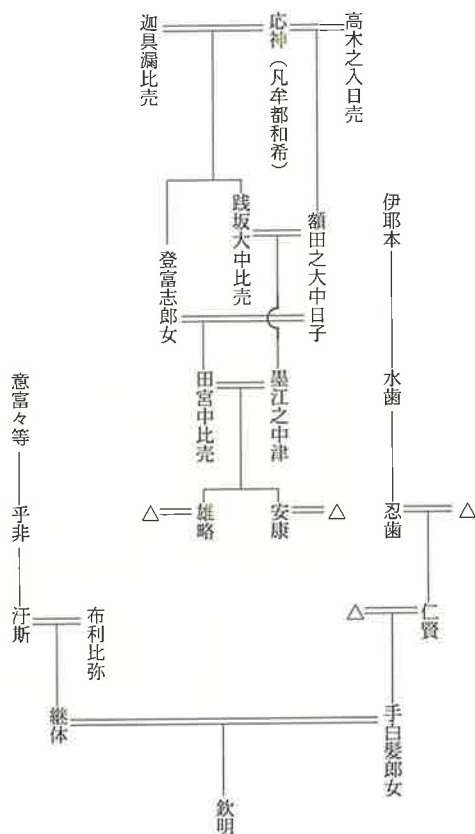


西條氏はここから出発して、欽明代頃に次の系譜①が、推古代に系譜②が、七世紀後半に記紀の系譜③が成立したとした。

西條氏が系譜の成立過程を三段階としたのは賛成であり、「七世紀後半」を「天武・持統以後」とすれば、それは筆者のいう系譜(一)・(二)・



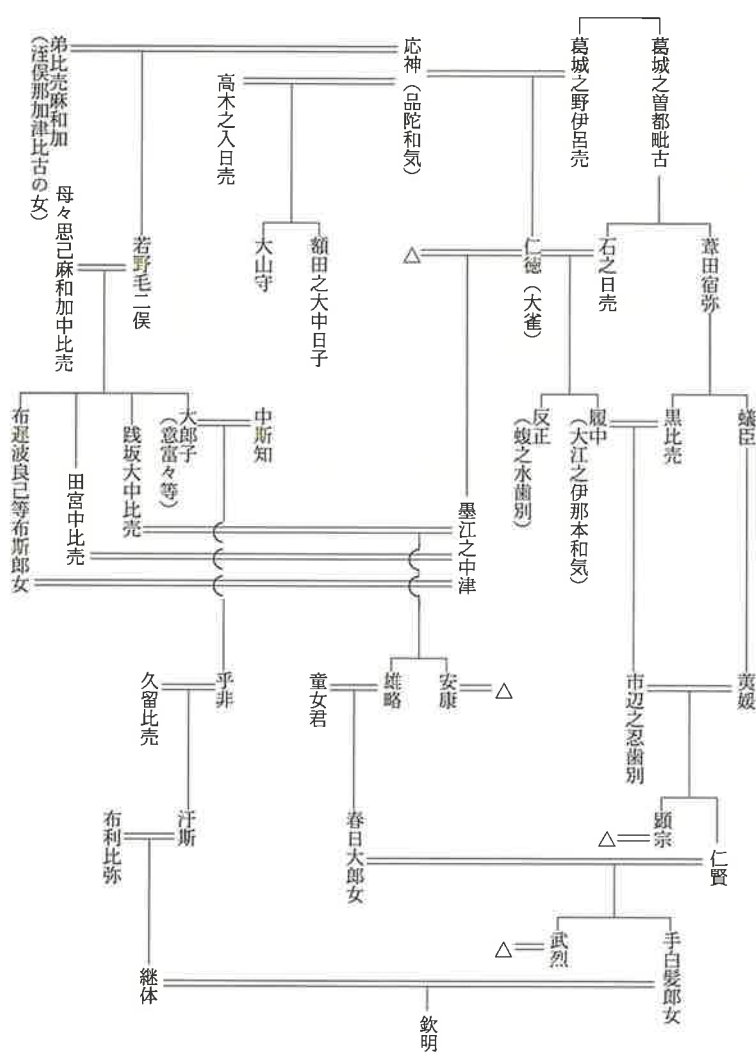
系譜⑤（系譜㉑）の目的は、葛城氏を継承した蘇我氏の意向を受け、仁賢を応神につなげながら、その間に葛城系倭王を創出することと、それと連動して、継体祖先系譜に粉飾を加えながら、やはり応神につなぐことである。その目的で系譜④は改変されたのであるが、どうして



額田之中大日子は倭王の座を追われるのであるが、それによって踐坂大中比売・登富志郎女（布遲波良己等布斯郎女）は一代下げられ、田宮中比売の姉妹となり、同時にこの三人は意富々

- 5 -

系譜⑤ (系譜二)



等の三妹で、かつ墨江之中津の三妃となった（この時、安康・雄略の母は田宮中比売から踐坂大中比売に変わった）ので、繼體の始祖の意富々等の権威が著しく高められた。一方、額田之中大日子に代わって倭王になったのは葛城氏の祖先の伊耶本（履中）であり、その子の水齒（反正）も倭王とされた。この時、履中・反正・忍齒には、「大江」・「蜷」・「市辺」が冠され、凡牟都和氣にならって「別」が付された。忍齒

には一般には「別」がないが、清寧記に「忍齒別王」とあるので、そうされた時期があったのである。

ここで問題は、墨江之中津の父母が不明となったのに、反正の後に即位したことである。これを解決する手段は、墨江之中津を反正の弟とすることであるが、同母弟とすることはできなかった。なぜなら、二人が同母兄弟なら、仁賢と春日大娘女の婚姻は、天武以後になって初めてみ

られる同母系親族婚となる⁽⁶⁾からである。系譜(二)では墨江之中津は反正の異母弟と位置づけられたはずである(系譜(二)では同母弟となった)。このようにして一端なった系譜では、仁徳は登場せず、その位置には履中がいたはずである。

しかしこれでは、応神・履中・反正と父子相承の王統となるから、忍鹵別を置いて墨江之中津が倭王となることは困難である。安康・雄略の父として墨江之中津は倭王でなければならないのであるが、それは履中を一代下げて、履中・反正、そして墨江之中津へと、兄弟相承の形式をとることによって解決が計られたのである。ここに仁徳が新しく登場する理由があるが、その名が大雀であるのは、また次のような事情からであると推測される。

系譜(二)で、始祖王は崇神から神武へと変わり、その間に欠史前五代が加えられた。そればかりか、^{クラシ}帯系王として景行・成務が挿入されもした。系譜(二)では系譜(一)の王統に大きく手が加えられ、神武以下の王陵が特定された⁽⁷⁾。この時、応神陵は河内古市誉田の前方後円墳「誉田陵」(雄略紀9年7月条)に決定されたので、応神の名が品陀和気と改められたのである。同時に、毛受(百舌鳥)の耳原の三古墳が葛城系三王陵と指定され、その最大の古墳が仁徳陵とされたので、仁徳は「大陵」の意のオホサザキとされた⁽⁸⁾。しかし「大陵」では人名にならないので、毛受(鳥)に因んで大雀とされたのであろう。仁徳と同世代に鳥に因む名をもつ人物が多いのはこれに関係し、速総別・女鳥物語を含む石之日売嫉妬物語、即ち、鳥の物語もこの時につく

られたのである。

新しく倭王となった仁徳・履中・反正には葛城の女性が正妃として配された。系譜(二)では仁徳の母は中日売であるが、系譜(二)では葛城之野伊呂売であったことについては、別稿で詳論する。葛城之曾都毗古から始まる葛城系譜は系譜(二)で加えられたのである。王妃としてはワニ氏の女性もこの時に登場した。履中の母は葛城の石之日売であるから、墨江之中津の母はワニ氏の女性とされたに違いない。そうするとその女性とは、応神と丸邇之比布礼能意富美の女の宮主矢河枝比売との間の子、八田若郎女を置いて他にない。宮主矢河枝比売の子としては、宇遅能和紀郎子と女鳥がいるが、宇遅能和紀郎子が大山守を討伐し、さらに仁徳と位を譲り合ったとあるのは、王統が反正から異母弟の墨江之中津へと遷る理由づけ、伏線であろう。

系譜(一)では、葛城系倭王は仁賢だけであった。系譜(二)では、葛城系の仁徳系王統を架上しながらも、仁賢一代を顕宗・仁賢・武烈の三代とした。武烈(小長谷若雀)については議論が分かれるが⁽⁹⁾、その名は仁徳の大雀、雄略の大長谷若建、崇峻の長谷部若雀と共通するので、これらの名を参考にした虚構とみる方がいいのであろう。顕宗については後述する。

系譜(二)は系譜(二)でまた手を加えられたが、その目的は、王統譜の要所に「息長」・「倭根子」の人物を配することであった。允恭の名の「浅津間」は、地名として大和国葛上郡朝妻にもあるが、西條氏の指摘どおり、それは近江国朝妻郡に因むもので、そこは息長氏の本拠である。

(6)原島礼二『倭の五王とその前後』塙書房、1970年、18～31ページ。

(7)拙稿注(4)(B)

(8)オホサザキが「大陵」のことであることについては、直木孝太郎「応神天皇の实在性について」(同『飛鳥

奈良時代の研究』塙書房、1975年)を参照。

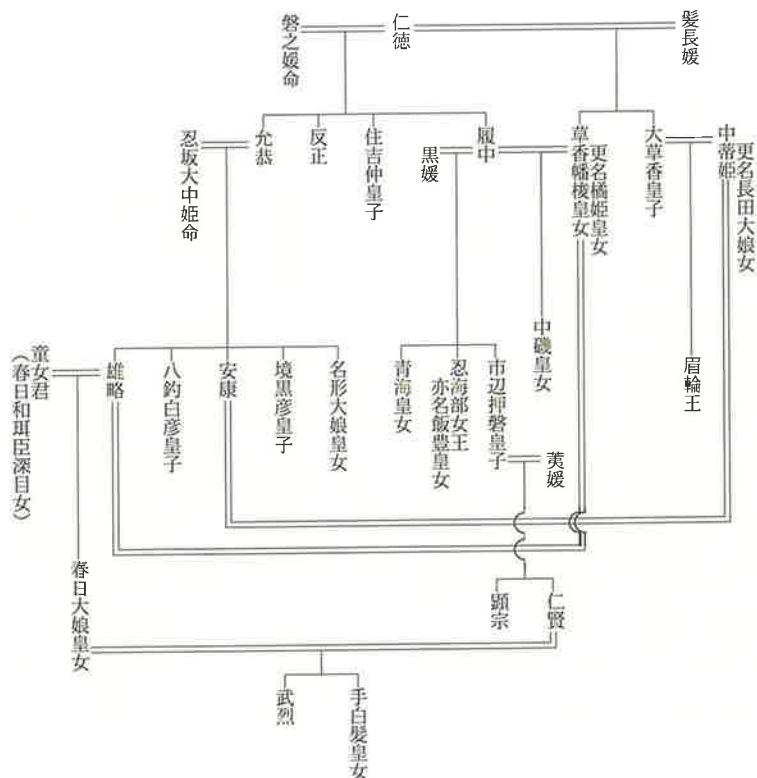
(9)山中鹿次「武烈天皇に関する諸問題」(横田健一編『日本書紀研究』19、塙書房、1994年)は、諸説を批判的に紹介している。

仁賢・顯宗物語は、雄略がこれという理由な

雄略によって父の忍齒を殺された、仁賢・顕宗兄弟の流離と即位の物語は、その系譜を含めて、従来から強い関心を以て批判的に検討されてきた。五世紀末頃の倭王とされた仁賢・顕宗



系譜⑦(紀)



くして、忍齒を殺したところに端を発している。そしてその直前には、次のような物語がある。即ち、雄略と大日下（大草香）の妹の若日下部（草香幡媛）を婚姻させようとした安康の提案を承諾し、大日下は礼物として押木の玉纒を献上した。ところが、使いにたった根臣がそれを横領したばかりか、大日下が不遜な言葉を吐いたと讒言したので、怒った安康が大日下を殺し、大日下の妻の長田大郎女（中蒂姫）をも奪ってしまった。そして後日、大日下の子の目弱が安康を暗殺し、都夫良意富美の許に逃げこむのであるが、雄略がそれを攻めて二人を殺すのである。

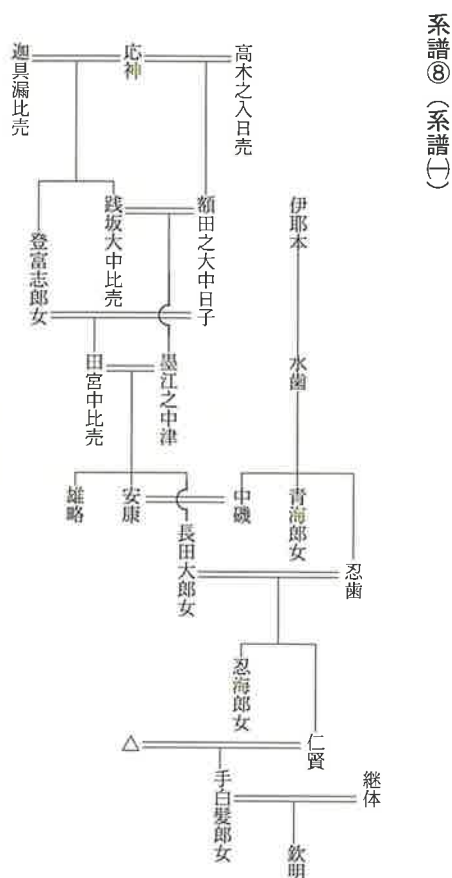
目弱物語は、忍齒難死物語と同様に、雄略即位物語の一環をなすが、その内容は極めて虚構性が強く、それに安康・長田大郎女と雄略・若日下部の婚姻は、安康・雄略がそれぞれ一世代上の女性と婚姻したことになっていて、極めて不自然である。この点を指摘しながら大橋信弥氏は、目弱物語は後の作為であって、その目的は、忍齒が安康を殺したという史実を、目弱が安康を殺した、と改変するところにあったと説いたのである⁽¹¹⁾。

大日下・若日下部は仁徳の子とされているが、仁徳の子が系譜に登場するのは、系譜(仁)以後のことである。目弱物語は物語(仁)以後につくられ

(11)大橋信弥「雄略朝成立前夜の政治過程」(同『日本

古代の王権と氏族』吉川弘文館、1996年)

たことは確実であり、その目的の一つは、大橋氏の説くように、安康を殺した人物を陰蔽するためと思われるが、それが忍齒であるというのは疑問である。なぜなら、系譜(一)では忍齒は王族ではなかったから、安康を殺す理由も力もなかったのである。西條氏は、系譜(一)では忍齒は讃の子であったとしたので、別稿で大橋説を支持して行論した⁽¹²⁾が、それはやはり極めて疑わしい。系譜(一)では、安康・雄略の兄弟継承は唯一の例であるから、安康は物語上、短命でなければならず、史実の次元を離れても、誰かに殺される運命にあった。その犯人は雄略以外に考えられず、物語(一)では、雄略が忍齒だけでなく、安康をも殺したとしていたのであろう。しかし後に、倭王を殺した人物が倭王になる、という設定だけは避けようとして、目弱物語が構想されたと思われるのである。



ここで説明を要するのは、青海郎女と忍海郎女である、青海郎女には記によると忍海郎女と飯豊の二つの亦名がある。小林氏は、系譜⑧の

(『国士馆大学文学部創設三十周年記念論集』1996年)

忍海郎女の位置には、原伝では飯豊が座っていたとするが、飯豊は系譜(一)で忍海郎女の亦名として登場したのである(後述)。問題は、青海郎女と忍海郎女が系譜(一)に別人として登場していたことを、説明することであるが、そのためには、流離物語にたち入る必要がある。

山尾幸久氏は、物語には播磨の縮見が必須の要素であることや、『播磨風土記』(以下、風土記)に二王の宮の伝承が伝えられていることなどから、本来は主人公は一人であるが、その人物は播磨在地の人物であったとする⁽¹³⁾。これに対し小林氏は、『住吉神代記』に、「葛城_乃志志見_乃与利木田_乃忍海部_乃刀自」なる人物がみえることを紹介した山尾説を逆に用い、葛城に志志見(縮見)の地があったのであるから、ここが本来の舞台であったとする。また大橋氏も別稿で⁽¹⁴⁾、流離物語は、「ひとつの王権史構想によって述作されたものであり、史実の断片も含まない」として、二王は「雄略の治世中に葛城氏の掌中に庇護されていた可能性が高い」と説いたが、その根拠には、顕宗紀冒頭分注の次の記事がある。

譜第曰、市辺押磐皇子、娶蟻臣女萐媛。遂生三男二女、其一日居夏姫。其二曰億計王。更名嶋稚子。更名大石尊。其三曰弘計王。更名来目稚子。其四飯豊女王。亦名忍海部女王。其五橋王。一本以飯豊女王。別敍於億計王之上。蟻臣者葦田宿祢之子也。

この分注は、「譜第」と「一本」を引用したものであるが、飯豊は「譜第」によると二王の妹、「一本」によれば姉になる。この「譜第」

の性格について大橋氏は、「譜第」が二王の母を「蟻臣女萐媛」とし、さらに付注者が末尾に「蟻臣者葦田宿祢之子也」としていて、いずれもウジ名を明記していないことから、それは仁徳以下の葛城系王統について詳細に記述した、葛城氏の関与による「帝紀」の一種であると推測した。そしてそれによると青海郎女と飯豊は別人物で、後者は本来は二王の姉か妹であり、それが葛城忍海の高木角刺宮に居たとあるから、二王も飯豊とともに、葛城で保護されていたと考えるのである。

大橋氏の指摘のとおり、「譜第」は、少なくとも仁徳以下の葛城系王統の系譜を記していたから、それは系譜(一)以後のもので、飯豊を仁賢の妹としていた。それに対し、記は飯豊を青海郎女の亦名としているから、それは系譜(一)とみてよく、そうすると、「譜第」は系譜(一)に関係する。しかし一方では、「皇子」などの語があり、人名表記が紀と一致する(仁賢の億計、顕宗の弘計)から判断すると、それは八世紀初頭に原史料の表記を漢式に改めて統一してつくった、紀の一原本ということができる⁽¹⁵⁾。

小林・大橋氏が説くように、物語(一)では仁賢は妹とともに葛城の忍海に潜伏していた。ただ、その妹の名は飯豊ではなく、忍海郎女(忍海部女王)であった。そしてこの二人を保護していたのが、男女の道に親しまず、葛城忍海の角刺宮に隠遁していた(清寧紀3年秋7月条)、姨の青海郎女なのである。そしておそらく、青海郎女は亡くなり、仁賢・忍海郎女は辛酸をなめるのであるが、雄略が継嗣を残さずに世を去っ

(13)山尾幸久「倭王権による近畿周辺の統合」(同注(1)書)

(14)大橋信弥「顕宗・仁賢朝の成立をめぐる諸問題」(同注(10)書)

(15)紀の「原本」・「稿本」・「完成本」については、拙稿『古代朝鮮諸国と倭国』(雄山閣出版、1997年)を参照。

原本とは紀編纂の第一段階として、家記などの断片的史料に手を加えたもの。稿本とは、第二段階として、原本などを用いて一応の編年体通史としての本文をなしたものの、完成本は、稿本に文飾を加えながら、原本を参照して付注したものである。

た後、忍海の志志見で忍海部造氏によって見出されたのであろう。さらに忍海郎女の名がわざわざあげられていることからすると、自ら積極的に名乗り出たのは、妹の忍海郎女であったといえる。ところが、後述のように、物語(二)では仁賢は葛城の地を離れ、弟の顕宗とともに流離の旅に出るので、忍海郎女は葛城に残って、後に仁賢・顕宗の後見人のようにたち現れるようになった。ここに忍海郎女は青海郎女の亦名となった、仁賢・顕宗の姉として登場するようになったと考えられるのである。

「譜第」には、それ以外にも指摘しておくべき問題を含んでいる。第一、それは系譜(一)を継承したものであるが、系譜(二)では仁賢・顕宗兄弟が登場し、それぞれ嶋稚子・来目稚子とも呼ばれていたということである。記や紀の本文はこの通称を用いていないから、物語(二)ではそれは基本的に無視されたのである。ただ、紀本文には仁賢紀の次の一箇所だけに「嶋郎」がみえる。

億計天皇、諱大脚（分注。更名大為。自余諸天皇、不言諱字。而至此天皇、独自書者。拠旧本耳）。

字嶋郎。

分注によれば、「諱」字を用いるのは特殊であるが、それは「旧本」に拠ったとある。「旧本」とは稿本のことと考えてよく、稿本はまたなにか特殊な原本に拠ったのである。「字」とあるのも特殊であるから、これもその原本に拠るとしてよい。そうすると、その原本記事は、分注の「更名大為」を含めて、「諱大脚。更名大為。字嶋郎」であったと考えられる。稿本はこの原本（後述）の「諱」「字」などに引かれて、それを本文としたのであるが、その他ではそのようなことがない。記紀本文は基本的に嶋稚子・来目稚子については関心がなく、紀の分注は、完成者が原本を参照して付注したのであ

るから、この通称は系譜(一)（「譜第」）の産物なのである。

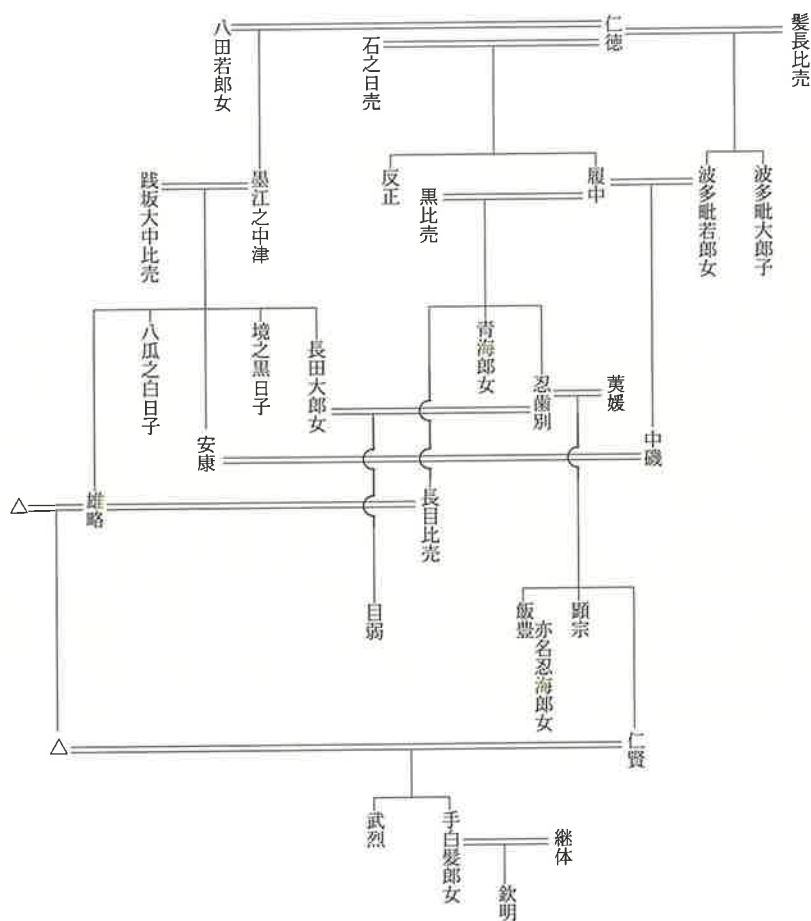
第二、仁賢・顕宗には姉の居夏姫、弟の橘王がいることである。姉がいるなら忍海郎女の役割はなく、弟がいるなら仁賢・顕宗流離物語は宙に浮く。これをどう解釈するかであるが、それは「譜第」がなんらかの理由で八世紀初頭に付加したと考えるしかないであろう。

3. 「目」の物語

系譜⑧（系譜(一)）は、推古代に次の系譜⑨（系譜(二)）になった。

この系譜とともに、雄略が安康と忍齒を殺したという話は、安康が雄略と忍齒別の妹を婚姻させようとしたが、忍齒別が拒絶したので、安康が忍齒別を殺し、自身は忍齒別の遺子（系譜(二)では大日下の遺子）の目弱によって殺された、という話に変えられた。幼少の目弱が安康を刺殺することができたのは、安康の身辺近くにいたからであるが、そのためには安康が忍齒別の妻の長田大郎女を奪うという設定が必要であった。長田大郎女は安康の同母姉であるから、それはタブーを破ったことになるが、それは安康の死によって贖われるので、問題とするには及ばなかったのである。また、系譜(二)では忍齒別は倭王の子とされていたから、安康の申し出を拒絶するだけの権威があったのである。ここで安康を殺したのが仁賢であってはならないので、仁賢は葛城の菟媛の子とされた。また、安康が忍齒別を殺すのであるから、安康妃の中磯が忍齒別の妹というのもふさわしくなく、仁徳・履中妃を補う目的もあって髪長比売系譜をつくり、中磯を履中の女とした。そして忍齒別の妹で、後に雄略妃となる女性は長目比売とされたのである。

系譜⑨ (系譜二)



物語(二)の際立った特徴は、目弱・長目など、「目」の物語として構想されたことである。忍海郎女が昼間は視力のないフクロウの意の飯豊を亦名とするのは、そのためである。

系譜(三)ではさらに、忍齒別・長目比売兄妹の話は、大日下・若日下部兄妹の話に変換され、目弱は大日下の子とされた。その大日下・若日下部は波多毗大郎子・波多毗若郎女の亦名とされて、王統譜に組み込まれたのであるが、波多毗大郎子が大日下なる亦名をもち、波多毗若郎女が長目比売と若日下部という二つの亦名をも

つのは、このためである。また、目弱の父でなくなった忍齒別は、理由の曖昧なままに雄略に殺されるのである。目弱の母の長田大郎女は大日下の妻となるのであるが、記ではこの女性は安康の姉としてもその名を残した。紀はやはりそれを問題視し、大日下の妻を長田大娘女、安康の姉を名形大娘として区別した。系譜(一)・(二)では安康妃であった中磯は、系譜(三)で長田大郎女が安康妃となることによって影が薄くなり、長田大郎女と同一視されるようになった。記は中磯の存在そのものを消去したが、紀は少し表

記を変えて中蒂としながら、中蒂を長田大娘女の本名としたのである。これで系譜・亦名の謎はほぼ氷解するが、紀の雄略妃の「更名橘姫」だけは由来が不明である。あるいは長目比売は、橘長目比売とでもされていたのであろうか。

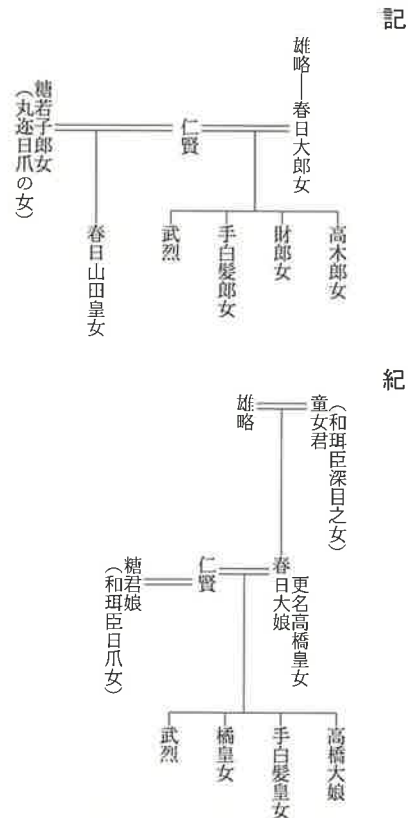
さて、物語(一)で目弱は葛城の都夫良意富美の許に逃げこんだのであるが、その「都富良」も目を「つぶる」の意と解され⁽¹⁶⁾、やはり「目」に関係する。雄略が日弱と都富良意富美を討つ時、境之黒日子・八瓜之白日子二兄をも殺したとあるのは、物語(一)で安康と忍齒を殺したとあるのに代えたものと思われるが、「境」には、後述のように、また特別な意味があったのである。

雄略が都夫良意富美を討って、その女の訶良比売と「五処之屯宅」(葛城之五村之苑人)を奪ったとある話には、二つのねらいがあるようである。第一は、雄略が長目比売と訶良比売を妃とすることで、雄略を葛城系譜により密接に関係づけたことである。第二は、後に蘇我氏が葛城氏の後裔と称して葛木県(五処之屯宅)の返還を要求する(推古紀32年10月条)、その歴史的伏線である。史実としては、仁賢即位後、葛城氏の所領の中心地が、葛木県として倭王直属の地になったとみるべきであろう。

「目」の人物はひき続き、紀に山部連先祖伊予来目部小楯、縮見屯倉忍海部造細目、近江狹城山君の妹置目、記に山代の面黥老人が登場する。これらの人物と関連し、山尾・大橋氏は、所伝の一部を付加的要素とみたり、氏族伝承に基づくなどとするが、物語(一)は、一貫して「目」の物語として、王権によって構成されたのであ

り、記紀に異同があるのは、それぞれに最終的な取捨選択があったからとみるべきであろう。

「目」の人物はもう一人いる。記にはみえないが、紀に出る雄略妃の童女君の父、和珥臣深目である。童女君は仁賢妃の母とされているが、その関係系譜は次のとおりである。



紀の仁賢妃の春日大娘は、更名が高橋であるが、その名はその女の高橋大娘と一致する。これは、もと春日大娘の位置には高橋大娘がいたが、春日大娘が挿入されたことによって、高橋大娘の世代が一代下げられた、という可能性を

(16) 及川智早「都夫良意富美と目弱王攷」(『古代研究』19、1987年)。なお直木孝次郎『奈良』(岩波新書、1971年、61～63ページ)は、「都夫良」を葛城地方の地名(御所市柏原のツブラ)とするが、「都夫良」は後述の

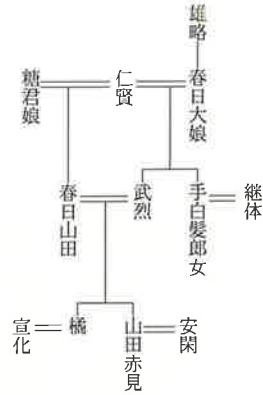
ように、継体の女の都夫良郎女を参考にした可能性の方が高い。いずれにしても、系譜(一)は「都夫良」を「目」に関係する語として用いたのである。

示している。そうとすれば、童女君と春日大娘は、和珥臣深目とともに系譜(二)で挿入されたことになり、仁賢妃は系譜(一)では高橋大娘であったことになる。そしてそれはおそらく確実である。物語(一)では、仁賢の父の忍齒を殺したのは雄略とされていたと思われるから、仁賢が雄略の女を妃としたということにはなっていなかったのである。ところが物語(二)では、忍齒別を殺したのは安康とされたので、仁賢は改めて雄略の女を妃とすることになったのである。

高橋大娘の出自については、仁賢紀元年2月条分注引用「一本」が、「和珥臣日觸女大糠娘、生一女、是為山田大娘皇女、更名赤見皇女」としているのが参照される。この「日觸」は明らかに「日爪」の誤りであるが、そう誤ったのは、日觸が仁賢妃に絡んで伝えられていたからであろう。和珥臣日觸の女の高橋大娘こそ、系譜(一)の仁賢妃で、手白髪郎女の母であったのである。このことは、応神妃に「和珥臣祖日觸使主之女宮主宅媛」とあるのによって傍証される。系譜(二)で深目系譜が挿入されたのにともない、日觸はその位置を追われ、応神妃の父となって登場したのである。記は高橋大娘の重複を嫌ってか、春日大娘の亦名を消し、高橋大娘をも高木郎女と改名したと考えられる。

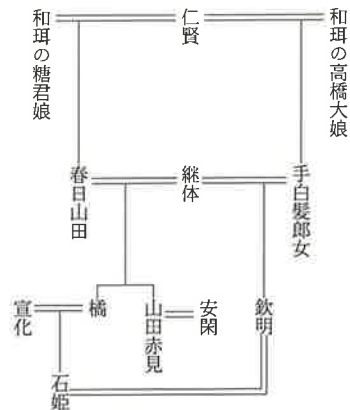
ことのついでに、春日山田と橘について言及しておく。この二人は、それぞれ一世代下の安閑と宣化の妃となっているが、ここにも系譜の操作が想定される。春日山田に山田赤見という亦名があるのもそれを裏づける。推測される系譜(二)は、次のようなものであろう。

記には武烈妃の名がないが、紀には春日娘子とある。系譜(二)では武烈妃の名があったはずであるが、その春日娘子とは春日山田の変形であろう。山田赤見と橘はその女で、男子はなかった。ところが系譜(二)は、武烈と春日山田の間を



断って、その女の山田赤見を春日山田の更名とし、橘も一代上げて武烈の姉（記の財郎女）としたのである。その目的は、武烈での王統の断絶をより明確にするため、武烈を暴君としたのもこの段階であろう。紀は武烈の悪虐ぶりを漢籍を駆使して描写しているが、それはほとんど紀編纂の完成者の文である。しかし、完成者がそうしたのは、物語(二)に既にそのような記述があったからと思われる。

武烈は系譜(二)での付加と考えられるから、系譜(一)は次のようであったと推定される。



これによると、仁賢は和珥氏の二女性を娶っており、その二女がまた継体の二妃となってい

る。そして安閑・宣化は、異母姉妹のなかでも和珥氏系の女性を正妃としている。これはおそらく当時の史実に近く、仁賢・継体以後、和珥氏系女性との婚姻が、倭王としての地位を保証したもののよう考えられる。

系譜・人名についてなお付言すべきは、系譜(二)の人名と、継体・欽明代の人名との不思議な一致についてである。即ち、仁徳の母の野伊呂売、仁徳妃の石之日売、履中妃の黒比売、忍齒別の妻の菟媛は、継体妃の野郎女、欽明妃の石比売、継体妃の黒比売、同じく波延比売と一致し、長目比売と都夫良意富美は、野郎女の亦名の長目比売と都夫良郎女とも一致するのである。この多くの人名の一致は偶然とは思われず、系譜(二)はやはり継体・欽明代の人名を参考にしたと思われる。仁賢の母とされた菟媛は系譜(二)の産物で、原伝では仁賢の母は別人(長田大郎女)であったのである。

4. 来目稚子物語

仁賢・顕宗兄弟は、実在の一人の倭王が分化したものであることについては、既に説がある。山尾氏は、仁賢は系譜の主人公、顕宗は物語の主人公であることからして、実在の人物は一人とした。その一人が仁賢であることについては、仁賢の女が継体以下の王統に必須の存在であるのに対し、顕宗には子がなく、系譜的に浮いた存在であることでわかる。和田萃氏は、顕宗の宮が近飛鳥八釣宮とされているが、それは允恭の遠飛鳥宮とともに、七世紀の宮居の事実をもとに生まれた伝承であると思われるのに対し、仁賢の石上広高宮には具体的な伝承があり、石上部の分布が確認されることから、仁賢だけ

が実在の倭王であるとした⁽¹⁷⁾。これらはいずれも従うべき見解と思われるが、その分化の理由としては、山尾氏が「物語の趣向からであろう」と説明したにとどまる。小林氏はこの点を指摘し、かつ、嶋稚子・来目稚子は記にみえないから、それは仁賢・顕宗流離物語の二次的発展によって生まれた名であるとして、顕宗の実在を積極的に肯定した。しかし、嶋稚子・来目稚子の名は、流離物語とともに生まれたことに疑いはなく、小林説は肯定できないが、分化の理由については、さらに論議を深める必要があるのは確かである。

分化の理由の第一は、流離物語としての要求であろう。流離物語は本来、仁賢と忍海郎女が主人公となるべきであったが、それは女性には適しなかった。そこで忍海郎女は飯豊となった身を隠し、代わって顕宗が登場したのである。西條氏は、流離物語は物語(二)、仁賢・顕宗分化は物語(三)のこととするが、それは別々になったものではなく、一体となってなったものといわねばならない。

では、なぜ流離しなければならなかったのかであるが、流離物語が高句麗美川王物語と揆を一にすることが指摘されている⁽¹⁸⁾ように、実在の唯一の葛城系倭王の仁賢は、高句麗中興の英主、美川王にならって流浪し、苦難の旅の末に即位せねばならなかったからであろう。暴虐な伯父の烽上王によって父を殺された美川王は、身を卑しめて農家で傭作したり、時には濡衣を着せられながら苦難の逃避行を続け、烽上王死後に迎えられて即位するのであるが、この美川王こそ、仁賢の願ってもないモデルであったと思われる。推古代には高句麗との関係は親密であったから、高句麗始祖王の東明王や、中興の英

(17)和田萃『大系日本の歴史』2、小学館、1988年、237～242ページ。

(18)西田長男『日本古典の史的研究』理想社、1956年、432ページ。

主である美川王の話は伝わっていたはずである。

分化の理由の第二は、復讐譚に関係する。即位した仁賢は仇敵（物語Ⅱでは安康と雄略、物語Ⅲでは雄略）に復讐せねばならず、それは仇敵の墓を発くということ以外に方法がなかったのであるが、そうはならなかったという展開のためには、二人の主人公が必要であるからである。それも復讐は倭王が果たすべきであるから、架空の人物の顕宗が先に即位し、実在の仁賢が諫めて、後に即位するのである。播磨での名乗りが顕宗を主人公とするのは、本来の忍海郎女の役割を継承したためであるかもしれないが、それは顕宗が先に即位するということの、伏線なのである。

仁賢・顕宗が嶋稚子・来目稚子とされたのは、単に著名な神仙に結びつけられたということではなく、隠された深い意味があると思われる。その流離物語の主人公が顕宗で、それは「目」の物語として構想されたのであれば、来目稚子こそ、その意味を体現しているといわねばならない。

来目稚子で直ちに連想される人物は二人いるが、そのうちの一人は久米仙人である。久米仙人の伝承は、葛城山や葛城一言主神、樫原の久米の地と関連して伝えられている。一方、『万葉集』によると、摂津の姫島の松原や紀伊の美保の岩屋にクメノワクゴの口碑があったことがわかるが、松原や美保からすると、クメノワクゴは天女の子であった。久米仙人とクメノワクゴは、その名からして同一人物で、天女の子のクメノワクゴが成長して久米仙人になったということであろう。クメノワクゴや久米仙人の資料をあげ

ながら、山尾氏が、その物語は「金剛山を仙境とする、渡来人の関与の著しい、外来思想による伝承であろう」と推定したのは傾聴に値する。さらに小林氏は、葛城山麓には忍海氏や朝妻氏などの、朝鮮系金工集団が居住し、葛城鴨氏がその集団に薪炭を供給していたと指摘したが、山尾氏のいう外来思想とは、この忍海氏などの金工集団や葛城鴨氏がもちこんだものであろう。天女の物語は、後に主に海浜地方で語られるようになったが、葛城地方では早くから、金剛山（古代の葛城連峰の一つ）に降りた天女の物語があり、その子が辛酸をなめた後に名乗りをあげて昇天した、という伝承があったことが推測される。その天女の子の物語は、葛城忍海の地からたって、唯一の葛城系倭王となった、仁賢の姿に重ねられていたのであろう。

来目稚子で連想されるもう一人の人物は、麿戸（聖徳太子）の同母弟の来目である。来目は、その名からすると、樫原の久米の宮で蘇我氏同族を称する久米臣氏によって養育されたと思われる。推古10年（602）、来目は撃新羅將軍として出征したが、翌年、筑紫の嶋郡で不帰の客となった。麿戸は敏達3年（574）に出生し、603年には数えて三〇歳であったから、来目はまだ二〇代の青年であった。来目は来目稚子として昇天したとも、嶋稚子として常世国に旅立ったとも、観念されたのではなかろうか。天女の子がクメノワクゴの名をもつようになったのはこのためで、それは来目他界後のことであることはいままでもない。ここに天女の子を介して、仁賢が来目稚子と嶋稚子に分化するという、物語上の構想が成立したと思われるのである⁽¹⁹⁾。

(19) 奥田尚「峯ヶ塚古墳の被葬者推定をめぐって」（井上薫編『大阪の歴史と文化』和泉書院、1994年）は、来目稚子・嶋稚子が王子の来目から着想されたことを指摘したが、仁賢をも推古古代の物語の産物とした点に

ついては同意しかねる。また奥田氏は、仁賢の埴生坂本陵も来目の葬地の河内埴生山岡上を参考にしたとするが、その点も卓見であろう。

それではさらに、なぜ播磨が舞台になったかであるが、それは、この物語が中央での山官たる、山部連氏の成立譚となっていることに関係するのであろう。

仁藤敦史氏によれば、麻戸とその子の山背大兄を中心に、法隆寺周辺に形成された上宮王家は、播磨の各地や近江の栗太郡に領地を有し、伊予や讃岐の各地にも多くの庄倉屋を所有していた。法隆寺の所在地の平群郡屋部郷（夜摩郷）は、山部連氏の居住地であることに示されるように、上宮王家は山部連を通じて播磨に多く分布する山部を支配し、さらに山部連や近江狹狹城山君を通じて、近江栗太郎の土地を支配したのである⁽²⁰⁾。山部連氏は、上宮王家のために山部を動員して木材を供給しただけでなく、各地の山君・山直を通じて、土地の開発にも力を尽したと思われる。山部連の先祖が播磨で二人を発見したとあるのも、また忍爾別の遺骨を狹狹城山君の先祖が発見したとあるのも、このような状況を背景にしているといえる。紀に山部連氏の先祖が伊予来目部小楯（記では山部連小楯）とされているように、それは来目稚子の物語であるとともに、山部連氏の、ひいては上宮王家の物語なのである。大橋氏は、紀の名を論拠にして、山部連氏の先祖は伊予の久米直氏であったとする⁽²¹⁾が、それは史実を反映しているのではなく、伊予の来目部の実在を前提にした、物語の要請からくる造名ではないかと思われる。「小楯」も「楯並めて」がイの音で始まる地名（伊予）の枕詞である⁽²²⁾ところから、連想されたものなのである。そして仁徳記の速総別・女

鳥の「鳥」の物語で、追手の将として山部大楯連が登場することからすると、山部連小楯（小楯連ともある）は、山部大楯連とともに一対の名として物語(二)で造名されたものなのである。紀の山部連先祖に関する所伝は、山部連と来目を組み合わせるところに、その主眼があるのであって、史実とは無関係のことである。

嶋稚子・来目稚子物語は、その内容からすると、上宮王家と蘇我氏、蘇我氏のなかでも山背大兄を倭王に推戴しようとした、蘇我馬子の弟の境部臣摩理勢らによって、構想されたのではないかと考えられる。雄略が殺したその二兄の名に、「境」・「八瓜」と高市郡の地名が冠せられ、特に紀によると、境之黒日子（坂合黒彦）は目弱・都夫良意富美と行動をとともにして犠牲になったとあり、坂合部連贅宿称もそれに殉じたとあるのは、摩理勢の存在をぬきにしては理解しえないところである。境部臣氏の本拠地は高市郡軽の境であるが、久米の地はそれに隣接していた。来目は摩理勢の保護下にあったとみてよいのである。上宮王家や摩理勢のような人物によって、唯一の葛城系倭王であった仁賢が、葛城山麓の天女の子を媒介にして来目と結びつけられ、興味ある「目」の物語、顕宗・仁賢即位物語がつくられたと考えられるのである。

来目と来目歌・来目舞との名の一致も無視できない。記の神武建国物語によると、大伴氏の祖とともに久米直氏の祖が活躍し、来目歌（紀）がその物語のなかで重要な位置を占めているので、従来から大伴氏と久米氏の関係について、多くの論議が交されてきた⁽²³⁾。しかし、久米直

(20) 仁藤敦史「〈斑鳩宮〉の経済的基盤」(『ヒストリア』115、1987年)。なお、山部連氏と法隆寺の関係の密接なこと、播磨には法隆寺領が多く、山部・山直の存在が顕著であることについては、岸俊男「古代の画期、雄略朝からの展望」(『日本の古代』6、中央公論社、1986年)が既に指摘している。

(21) 大橋信弥「久米部の歌舞について」(同注(11)書)

(22) 日本思想大系『古事記』岩波書店、1982年、370ページ。

(23) 代表的なものとして、直木孝次郎「大伴連と来目直・来目部」(同『日本古代の氏族と天皇』塙書房、1964年)、大橋信弥「大伴氏の研究」(同注(11)書)、松原弘宣「久米氏についての一考察」(横田健一編『日本書 7

とは、あくまでも地方の来目部の管掌者であり、中央周辺の久米直としては、養老3年11月に忍海手人らが久米直と改姓されたのが初見である。『新撰姓氏録』左京神別・右京神別にみえる久米直とは、この忍海手人の後身の流れとみるのが穏当なのである。そもそも来目部がいつ設置されたかが問題であるが、雄略紀2年7月条の池津媛事件のなかに出る「来目部」は、稿本の造作文であって⁽²⁴⁾、史料的に価値がない。清寧即位前紀に星川の乱と関連して城丘前来目が登場し、それには「闕名」の分注が付されているが、それは付注者の誤解であって、「来目」は名と考えられるから、それは来目部とは無関係である。雄略紀9年3月条には、大伴談連とともに新羅で戦死した人物として紀岡前来目連が登場するが、これはどうみても城丘前来目を参考にした稿本の造作である。来目連は、天武12年9月に来目舍人造が来目連となったとあるのが初見なのである。来目舍人造の存在からは、来目部から来目舍人が上番して久米の宮に奉仕したことが推察されるが、舒明即位前紀の来目物部伊区比によれば、来目舍人は「物部」としても使役されたのである。来目部の存在を裏づけるのは、王子の来目と来目物部伊区比が上限であり、そのことからすると、来目部は王子の来目が養育された、久米の宮に奉仕する集団として、設定されたとみるのが妥当であろう。

物語(一)の建国物語では、大伴氏の祖とともに活躍したのは物部氏であったはずである。それが物部守屋討滅後の物語(二)で、物部氏に代わって来目直の祖が登場したのである⁽²⁵⁾。その頃、来目氏としては来目臣・来目舍人造がいたが、

前者は蘇我氏同族を称し、後者は「舍人」をウジ名に含むので、その祖が建国物語に登場する立場にはなかった。そこで中央的には実体のない来目直が登場したのであるが、それが紀のように、大伴氏の祖が大来目部を帥いるというようになるのも、自然の勢いというべきである。

物語(二)が「来目」にこだわったのは、来目稚子と同様に、王子の来目の存在があったために違いない。遥かなる客地で二〇代にして早逝した来目は、それだけに愛惜の念をもって追想され、記紀の物語にその分身が印象深く刻みこまれたといえよう。来目歌も、来目直や来目部の歌ではなく、高市郡周辺の民謡が戦闘歌として改作され、それに王子の来目の名が付されたものであろう。大嘗祭で来目舞を奏上したのが来目氏ではなく、大伴氏と佐伯氏であったのも、もともと来目歌が来目氏の伝承歌でなかったのであるから、それはまた当然のことなのである。

さて、今まで避けて通ってきたが、実在の倭王、仁賢の実名はなんであったかである。仁賢は記で意、紀本文で億計、ある特殊な原本で「諱大脚。更名大為。字嶋郎」、「譜第」で大石とされ、顕宗は記では袁之石巢別、紀で弘計とされた。また風土記では、仁賢は於奚、顕宗は袁奚である。このうち対になる名の意・袁、億計・弘計、於奚・袁奚は、兄弟二人の物語上の名で、その意味は、山尾氏の説くように、二人が播磨で馬廿・牛廿として使役されたところから、飼葉桶の大筥・小筥ということであろう。そこで、大石を仁賢の実名とする考えが出てくるが⁽²⁶⁾、これも「大」からすると対の名として派生したものであろうから、実名とは考え

『究』19、1994年）などがある。松原氏は考古学的資料を採用して、来目部の設置を五世紀中葉とするが、方法論的に問題がある。

(24)拙稿「〈日本旧記〉・〈百濟新撰関係記事〉」(注15)

拙著)

(25)拙稿注(4)B)

(26)加藤謙吉「応神王朝の滅亡」(佐伯有清編『雄略天皇とその時代』吉川弘文館、1988年)

がたい。本来、単独の名と思えるのは石巢別で、「譜第」の「大石」は石巢別を参考にしたものであろう。山尾氏は、石巢別は来目稚子の石屋の住処の話から出たものとするが、そうとは断定できない。なによりも重視したいのは「別」である。「別」は、応神にならって、系譜(二)で葛城系倭王に付されたものか、あるいは石巢別を基点として溯って葛城系倭王に付されたものと考えられるからである。この石巢が二人に分化する過程で、大石と石巢となり、石巢は顕宗の名となったといえるのではなかろうか。大脚・大為は、やはり大石から出たものであろう。

大脚・大為の名を伝えたある原本とは、「字嶋郎」とあることからしても、物語(二)を参考にしたものであることがわかるが、それは山部連氏家記に基づいたものと推測される。

山部連氏は、紀編纂に際して家記を提出したはずで、それには忍齒別難死から山部連氏成立に至る、一部始終が語られていたとみてよい。顕宗紀元年4月条の小楯褒賞記事の「来目部小楯」には、「更名磐楯」の分注が付されているが、この磐楯は、大楯・小楯を嫌った山部連氏の所伝であろう。また忍齒別に殉じた「佐伯部売輪」にも「更名仲手子」の分注があるが、売輪(「売」は目が潤むの意か)は眉輪(目弱)とともにつくられた名で、仲手子はやはり山部連氏の所伝に出るものであろう。このように、山部連氏家記は物語(二)の人名を少しずつ変えているので、大脚・大為もその一環と考えられるのである。

飯豊を仁賢・顕宗の姉とした「一本」も山部連氏家記に基づいた原本であろう。これに関しては、『扶桑略記』が「和銅五年上表日本紀」に抛り、「飯豊天皇」一代をたてながら、飯豊

を仁賢・顕宗の姉としていることが注目される。この「和銅日本紀」は、養老4年の紀の前身、即ち稿本と考えるしかないが、稿本は山部連氏所伝を正伝とし、それを参考にして「飯豊天皇」としたのであろう。顕宗紀即位前紀の「天皇姉飯豊青皇女、於忍海角刺宮、臨朝秉政」はその名残りであるが、同年に奏上された記が飯豊の「臨朝秉政」を語っていなかったのも、完成者は「飯豊天皇」とはしなかったということと思われる。流離物語に関しては、もう一本の原本があった。顕宗紀分注に、

或本云、弘計天皇之宮、有二宮焉。一宮於小郊、二宮於池野。

とあり、また仁賢紀分注に、

或本云、億計天皇之宮、有二宮焉。一宮於川村、二宮於縮見高野。其殿柱至今未朽。

とあるが、ここに引用された「或本」がそれである。

この四宮に関しては、風土記にも同様の記事があり、それを高野宮・少野宮・川村宮・池野宮としていて、紀とほとんど一致している。紀と同様の内容を伝える、風土記の美濃郡志深里条の於奚・袁奚物語は、天武11年(684)以後につくられた「古資料」に基づいたものであるが⁽²⁷⁾、それに出る「天皇」は、在地の史実に基づく伝承というものではなく、物語(二)・(三)を参考にして国司などが付会したものであって、四宮のこともそれに属する。紀が参考にした「或本」とは、この「古資料」に手を加えたものといえるのである。

紀が「古資料」に基づく原本を参照にしたことは、隼別・雌鳥物語の追手の将の一人を播磨佐伯直阿俄能胡(記の山部大楯連)とし、その阿俄能胡が雌鳥の玉を奪って妻に与え、その玉

(27)拙稿注(4)(A)

を近江山君稚守山の妻が纏いていて、悪事が発覚したとあるのによっても、証明される。

風土記の神前郡多陀里条にみえる「品陀天皇」記事も、「古資料」に基づくと考えられるが、そこに「品陀天皇」に随従した「佐伯部等始祖、阿我乃古」が登場する。「品陀天皇」は付会であるが、阿我乃古は、在地で佐伯部の始祖として伝えられた人物であることに疑いはなく、紀の播磨佐伯直阿俄能古は、「古資料」の阿我能古を用いて付会したものなのである。

紀がなぜ佐伯直を付会したのかであるが、それに関しては近江山君稚守山が注意される。佐伯部・山君といえ、紀に仁賢・顕宗物語で、忍齒別とともに殺されたとある佐伯部売輪と、そのことに関係する近江狹狹城山君が直ちに連想されるのである。

佐伯直阿俄能古の悪事とその発覚は、押木の玉纒と同巧の物語であるが、そのことから次のような推測がなりたつ。紀編纂の第二次作業としてなった稿本は、佐伯部の先祖を蝦夷として伊勢神宮に関係づけた⁽²⁸⁾。当面の雌鳥物語も伊勢神宮に結びつけながら、佐伯直を登場させたのであるが、その際に利用したのが、古資料に手を加えた原本の人名であった。そしてまた押木の玉纒事件と同巧の語をつくったが、その際に佐伯部売輪と関係する、近江の山君をも登場させたということである。

5. 押木の玉纒事件

系譜⁽²⁹⁾では、忍齒別・長目比売の兄妹は、大日下・若日下部の兄妹のようにされ、目弱は大日下・長田大郎女の子とされた。そして安康が大日下を殺す理由として、押木の玉纒物語が挿

入された。また、この時、安康妃としての中磯が消去されたので、安康が自分の妃を定める前に、雄略と若日下部を婚姻させようとしたという、不自然な筋立てになってしまった。これら一連の操作の目的は、日下部(草香部)と草香部吉士・難波吉士の由来譚をつくるところにあった。その際、大日下と若日下部の系譜上の位置を、波多毗大郎子と波多毗若郎女の亦名とすることで、解決を計ったのである。

大日下・若日下部の亦名として波多毗大郎子・波多毗若郎女が選ばれた理由は、主に髪長比売が「日向之諸県君牛諸之女」であったからであろう。「日向」と「日下」との関係なのである。

諸県の髪長比売は系譜⁽²⁹⁾にあったが、当時はまだ日向国は存在していなかったから、「日向」の語はなかった。紀の景行西征物語は、熊襲関係記事を除くと、大部分が物語⁽²⁹⁾に属し⁽²⁹⁾、そこで景行は諸県まで南下して、諸県君泉媛と会っている。景行西征物語がつけられた推古代頃には、倭王権の支配は諸県にまで及んでいたのである。倭王権はこの最南の諸県を重視したのであるが、令制雅楽寮に雅楽の一つとして諸県舞が伝えられているのは、それを証明する。

物語⁽²⁹⁾では、天孫が日向国に降臨したとされ、それにとまって日向国がクローズアップされた。この時、諸県に「日向」が冠せられ、泉媛と髪長比売をヒントに、応神妃の日向の泉長比売、景行妃の日向髪長大田根が新しく加えられたのである。

物語⁽²⁹⁾によると、安康の申し出に同意した大日下が、礼物として押木の玉纒を献上したが、使いにたった坂本臣の祖、根臣がそれを横領したことから、事件が起こる。記にはないが、紀によると、大日下も安康も殺され、若日下部が

(28)拙稿注(4)(C)

(29)拙稿注(4)(C)

雄略妃となった後日の雄略14年夏4月、根臣の悪事が露見し、その子孫は二分されて、一は大草香部民となり、一は茅渟県主に与えられて負囊者になったとあり、また、大日下に殉じた難波吉士日香々の子孫に、大草香部吉士の姓を賜わったとある。ここに坂本臣や茅渟県主が云々されるのは、ただの造作ではないようである。

まず茅渟県主であるが、茅渟県陶邑（崇神紀7年秋8月条）、茅渟菟砥河上（垂仁紀39年10月条）、茅渟県有真香邑（崇峻即位前紀）の例からして、茅渟はほぼ和泉の北半部を占める地域であり、大草香部民（日下部）が設置されたと考えられる、大鳥郡日部郷もそれに含まれる。このことから、茅渟県主が日下部設置に関与したことが想定されているが⁽³⁰⁾、傾聴すべき見解である。坂本臣氏の本拠地は和泉郡坂本郷で、それは茅渟県主の本拠地と思われる、現在の和泉市の東方近辺にある。坂本臣氏の民が没収されたとあるのは、日下部設置に草香部吉士氏や茅渟県主氏が関与し、その一方で、坂本臣氏が打撃を受けた史実を反映していると思われる。日部郷は石津川中流域に相当するが、そこはまた須恵器生産地のただ中にある。この地域の日下部は、河内の日下の宮に須恵器を貢進するために設置されたと推定されるが、それは草香部吉士の関与からみて、六世紀以後のことに属する。このように、後世の日部郷をめぐる紛争を核として、草香部や草香部吉士・難波吉士の由来譚、押木の玉纒物語を構想したのは、従来からも指摘されているように、天武10年正月に難波連を賜姓され、同年3月に発議された「帝紀・旧辞」の記定作業にも参加した、草香部吉士大形に他ならないであろう。大形の強いイニシアチブの下に、目弱物語の上に押木の玉纒物語が

加えられたのである。

しかし、この物語は相当強引なもので、特に悪者とされた坂本臣氏らの激しい反発を受けたと思われる。粕谷興起氏によって紹介された、『日本書紀私記甲本』本文に傍書された「帝王紀」の文には、「日下の宮にいて、姪し女のように噂されている比加々は、かまきりのように卑しい奴だ。そこで、そのあごを引っぱって、首根っこに啗について殺してやった」とあって、紀では大日下に殉じた忠臣の日香々は、悪者のように描写されている⁽³¹⁾。粕谷氏は、音訓交用文体の「帝王紀」の文が、仮名遣からみて奈良時代以前のもので古く、それが原伝であるが、それを草香部吉士大形が後に改変したとする。粕谷説は貴重であるが、「帝王紀」の所伝が原伝であるとするのには疑問が多い。

粕谷氏は、「帝王紀」を漢訳した本文は、紀編者によって紀編纂の資料として述作されたとする。本文の「草香」・「日香香」の用字は、紀に一致するから、それは粕谷氏の説くとおりで、筆者のいい方によれば、「帝王紀」は原史料、本文は原本ということになる。しかし、この原史料は物語③の後に、それと対抗してつくられたものに相違ないのである。なぜなら、「帝王紀」のような内容が物語③の正伝としてあったなら、大形個人の力で善悪を逆転させるなどということは、不可能なことであろうからである。「帝王紀」が紀に正伝として採用されず、分注にも紹介されなかったのは、それが権威ある史料ではなく、正伝とは内容がかけ離れたものであったからであろう。したがって、「帝王紀」とは特定の書を指すものではなく、某倭王の即位事情に関することを記した、ある本の意味と考えるのが穏当で、該当部分は、安康の死と雄

(30) 藤間生大「古代豪族の一考察」(『歴史評論』86、1957年)

(31) 粕谷興起「大草香皇子事件の虚と実」(『皇学館論叢』11-4、1978年)

略の即位について記した一史料であるということにとどまる。断片的な遺文からすると、この一史料は、安康が「日下」王を殺した原因は、「日加々」にあったとしていたらしい。物語(三)の正伝に対し、敢て異を唱えながら、草香部吉士に挑戦したこの史料とは、紀編纂に際して提出された、坂本臣氏の家記であろうと推定されるのである。

草香部吉士と関連しては、紀に仁賢・顕宗に随従して、丹波国余社郡を経て播磨の縮見に至ったとある、日下部連使主・吾田彦父子のことが想起されるが、この両名の登場にも草香部吉士大形の手によるものと考えてよいであろう。風土記に「日下部連意美」の名が出ているのは、物語(三)にこの人物が登場していたからなのである。「草香」と「日下」は表記を異にするが、これは吉士氏と連氏を区別したものであろうか。日下部連父子は丹波国余社郡の地名に関連して登場するが、その理由は明白である。「丹波国余社郡管川人端江浦嶋子」(雄略紀22年秋7月条)は、『丹波国風土記』逸文によれば、日下部首の祖であるから、嶋稚子の仁賢は、日下部首の中央の統率者である日下部連を率いて余社を回るのである。草香部吉士大形は、日下部首らの浦嶋子伝承を知る立場にあったのであろう。

おわりに

五世紀の後半から末頃、雄略の次に倭王となっ

たのは、雄略とは血統を異にする葛城系の仁賢であった。そしてまた葛城系は一代で絶え、六世紀初に北陸・近江から継体が迎えられて倭王となった。仁賢・継体の即位は、和珥氏との関係が一つのポイントとなったらしく思われる。

葛城系の仁賢が倭王となった具体的な経緯は不明である。欽明代頃の所伝としては、仁賢の父の忍齒と倭王の安康は、それぞれの姉妹と夫婦関係にあったが、雄略によって殺害されたとしていたらしい。しかし、それがどこまで史実であるかは、混沌として判断できない。

推古代の編史事業では、葛城系王統が架上され、多くの物語がつくられた。仁賢は仁賢・顕宗兄弟とされ、その即位の過程もよりドラマチックなものに仕立てあげられたが、それは上宮王家や蘇我氏の構想によるものと考えられる。その構想の基底には、二〇代にして筑紫で客死した、厩戸の実弟の来目のことがあり、来目のことは、建国物語の来目直(来目部)や来目歌としても、その存在が刻まれた。

こうしてみると、五世紀以前の記の記事は、史実を反映したものが皆無に近く、紀の方も、大伴氏家記など、いくつかの氏族の家記に拠った断片的なことが、史実らしいと判断されるだけである。記紀の史料批判は、さらに深化されねばならないのである。

